臼井吉見編

戦後十年名作選集

6

坂口安吾
白痴

石川淳
黄金伝説

中野重治
おどる男

梅崎春生
桜島

佐多稲子
黄色い煙

高見順
あるリベラリスト

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに、「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお御職業、年齢などもお書きそえくださいませんか。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

戦後十年名作選集　第六集

昭和30年6月15日　初版発行
昭和30年7月15日　4版発行

¥ 130

編者　臼井吉見
発行者　神吉晴夫
印刷者　山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所　東京都文京区音羽町3　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします　〔美行製本〕

戦後十年名作選集

第六編

臼井吉見編

編集にあたって

臼井吉見

戦後はやくも十年を過ぎようとしている。これほどの混乱と動揺の一時期が、またとあろうとは思われない。たがいに、よくぞここまで生きぬいてきたという感慨を覚えぬものはあるまい。

時代を誠実に生きる人間の、たましいの表現でもある文学にとっても、この十年間は、ただならぬ特別の時期であったことは言うまでもなかろう。きびしい時代に出あって、一段とあざやかにその本領を発揮した作家もあり、この時期に、はじめて世に出た、特色ある新作家もすくなくない。いろんな個性的な作家が、あれこれと多彩な花を咲かせた大正期にくらべてみても、作風がはるかに複雑で、幅も広く、おもしろくもなっている。これらの作品のなかから、中・短編小説三十九編をえらんで「戦後十年名作選集」七巻を編集したのも、われわれにとって忘れることのできない、この十年の記念のためである。これはその第六集である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

編集にあたって……三
白痴……坂口安吾　五
黄金伝説……石川淳　四五
おどる男……中野重治　五七
桜島……梅崎春生　六七
黄色い煙……佐多稲子　一四三
あるリベラリスト……高見順　一八九
解説……臼井吉見　二四四

白痴

坂口安吾

その家には人間と豚と犬と鶏と家鴨が住んでいたが、まったく、住む建物もおのおのの食物もほとんど変っていやしない。物置のようなひん曲った建物があって、階下には主人夫婦、天井裏には母と娘が間借りしていて、この娘は相手のわからぬ子供をはらんでいる。

伊沢の借りている一室は母屋から分離した小屋で、ここは昔この家の肺病の息子がねていたそうだが、肺病の豚にもぜいたくすぎる小屋ではない。それでも押入と便所と戸棚がついていた。

主人夫婦は仕立屋で、町内のお針の先生などもやり（それゆえ肺病の息子を別の小屋へ入れたのだ）、町会の役員などもやっている。間借りの娘はがんらい町会の事務員だったが、町会事務所に寝泊りしていて、町会長と仕立屋をのぞいた他の役員の全部の者（十数人）と公平に関係をむすんだそうで、そのうちの誰かの種を宿したわけだ。そこで町会の役員どもが醵金してこの屋根裏で子供の始末をつけさせようというのだが、世間はむだがないもので、役員の一人に豆腐屋がいて、この男だけ娘が妊娠してこの屋根裏にひそんだ後もかよってきて、けっきょく娘はこの男の妾のようにきまってしまった。他の役員どもはこれがわかると、さっそく醵金をやめてしまい、この分かれめの一ヵ月分の生活費は豆腐屋が負担すべきだと主張して、支払いに応じない八百屋と時計屋と地主と何屋だか七八人あり（一人あたり金五円）、娘は今にいたるまで地だんだふんでいる。

この娘は大きな口と大きな二つの目の玉をつけていて、そのくせひどく痩せこけていた。家鴨

をきらって、鶏にだけ食物の残りをやろうとするのだが、家鴨が横からまきあげるので、毎日腹を立てて家鴨を追っかけている。大きな腹と尻を前後に突きだして、奇妙な直立の姿勢ではしる恰好が家鴨に似ているのであった。

この路地の出口に煙草屋があって、五十五という婆さんが白粉つけて住んでおり、七人めとか八人めとかの情夫を追いだして、その代りを中年の坊主にしようか、やはり中年の何屋だかにしようかと煩悶中のよしであり、若い男が裏口からたばこを買いに行くと幾つか売ってくれるよしで（ただし闇値）、先生（伊沢のこと）も裏口から行ってごらんなさい、と仕立屋が言うのだが、あいにく伊沢は勤め先で特配があるので、婆さんの世話にならずにすんでいた。

ところがその筋向かいの米の配給所の裏手に小金を握った未亡人が住んでいて、兄（職工）と妹と二人の子供があるのだが、この真実の兄妹が夫婦の関係をむすんでいる。けれども未亡人はけっきょくその方が安あがりだと黙認しているうちに、兄のほうに女ができた。そこで妹のほうをかたづける必要があって、親戚にあたる五十とか六十とかの老人のところへ嫁入りということになり、妹が猫イラズを飲んだ。飲んでおいて仕立屋（伊沢の下宿）へお稽古にきて苦しみ始め、けっきょく死んでしまったが、そのとき町内の医者が心臓麻痺の診断書をくれて話はそのまま消えてしまった。え？　どの医者がそんなべんりな診断書をくれるんですか、と伊沢が仰天してたずねると、仕立屋のほうがあっけにとられた面持で、なんですか、よそじゃ、そうじゃない

んですか、ときいた。

このへんは安アパートが林立し、それらの部屋の何分の一かを妾と淫売が住んでいる、それらの女たちには子供がなく、また、おのおのの部屋をきれいにするという共通の性質をもっているので、そのために管理人によろこばれて、その私生活の乱脈さ背徳性などは問題になったことが一度もない。アパートの半数以上は軍需工場の寮となり、そこにも女子挺身隊の集団が住んでいて、何課の誰さんの愛人だの、課長殿の戦時夫人（というのはつまり本物の夫人は疎開中ということだ）だの、重役の二号だの、会社を休んで月給だけもらっている妊娠中の挺身隊だの、がいるのである。中に一人五百円の妾というのが一戸を構えていて、羨望の的であった。人殺しが商売だったという満州浪人（この妹は仕立屋の弟子）の隣りは指圧の先生で、その隣りは仕立屋銀次の流れをくむその道の達人だということであり、その裏に海軍少尉がいるのだが、毎日魚を食いコーヒーをのみ罐詰をあけ酒を飲み、このあたりは一尺掘ると水がでるので、防空壕の作りようもないというのに、少尉だけはセメントを用いて自宅よりもりっぱな防空壕をもっていた。また、伊沢が通勤にとおる道すじの百貨店（木造二階建）は戦争で商品がなく休業中だが、二階では連日賭場が開帳されており、その顔役はいくつかの国民酒場を占領して、行列の人民どもをにらみつけて連日泥酔していた。

伊沢は大学を卒業すると新聞記者になり、つづいて文化映画の演出家（まだ見習いで単独演出

したことはない）になった男で、二十七の年齢にくらべれば裏側の人生にいくらか知識はあるはずで、政治家、軍人、実業家、芸人などの内幕に多少の消息はこころえていたが、場末の小工場とアパートにとりかこまれた商店街の生態がこんなものだとは想像もしていなかった。戦争以来人心がすさんだせいだろうときいてみると、いえ、なんですよ、このへんじゃ、先からこんなものでしたねえ、と仕立屋は哲学者のような面持でしずかに答えるのであった。

けれども最大の人物は伊沢の隣人であった。

この隣人は気ちがいだった。相当の資産があり、わざわざ路地のどん底をえらんで家を建てたのも気ちがいの心づかいで、泥棒ないし無用の者の侵入を極度にきらった結果だろうと思われる。なぜなら、路地のどん底にたどりつき、この家の門をくぐって見まわすけれども、戸口というものがないからで、見渡すかぎり格子のはまった窓ばかり、この家の玄関は門と正反対の裏側にあって、要するにいっぺんグルリと建物をまわった上でないとたどりつくことができない。無用の侵入者は匙を投げて引きさがる仕組みであり、ないしは玄関を探してうろつくうちに何者かの侵入を見やぶって警戒管制に入るという仕組みでもあって、隣人は浮世の俗物どもを好んでいないのだ。この家は相当間数のある二階建であったが、内部の仕かけについては物知りの仕立屋も多く知らなかった。

気ちがいは三十前後で、母親があり、二十五六の女房があった。母親だけは正気の人間の部類

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

に属しているはずだという話であったが、強度のヒステリイで、配給に不服があるとはだしで町会へ乗りこんでくる町内唯一の女傑であり、気ちがいの女房は白痴であった。ある幸多き年のこと、気ちがいが発心して白装束に身をかため、四国遍路に旅立ったが、そのとき四国のどこかしらで白痴の女と意気投合し、遍路みやげに女房をつれてもどってきた。気ちがいは風采堂々たる好男子であり、白痴の女房はこれもしかるべき家柄のしかるべき娘のような品のよさで、目のほそぼそとうっとうしい、瓜実顔の古風の人形か能面のような美しい顔立ちで、二人ならべて眺めただけでは、美男美女、それも相当教養深遠な好一対としか見うけられない。気ちがいは度の強い近眼鏡をかけ、つねに万巻の読書に疲れたような憂わしげな顔をしていた。

ある日、この路地で防空演習があってオカミさんたちが活躍していると、着流し姿でゲタゲタ笑いながら見物していたのがこの男で、そのうちにわかに防空服装に着かえて現われて一人のバケツをひったくったかと思うと、エイとか、ヤーとか、ホーホーという数種類の奇妙な声をかけて水をくみ水を投げ、梯子をかけて塀に登り、屋根の上から号令をかけ、やがて一場の演説（訓辞）をはじめた。伊沢はこのときにいたって初めて気ちがいであることに気づいたので、この隣人はときどき垣根から侵入してきて、仕立屋の豚小屋で残飯のバケツをぶちまけ、ついでに家鴨に石をぶつけ、全然なにくわぬ顔をして鶏に餌をやりながら、突然蹴とばしたりするのであったが、相当の人物と考えていたので、しずかに黙礼などを取りかわしていたのであった。

だが、気ちがいと常人とどこが違っているというのだ。違っているといえば、気ちがいのほうが常人よりも本質的につつしみ深いぐらいのもので、気ちがいは笑いたい時にゲタゲタ笑い、演説したいときに演説をやり、家鴨に石をぶつけたり、二時間ぐらい豚の顔や尻をつっ突いていたりする。けれども彼らは本質的にはるかに人目を恐れており、私生活の主要な部分は特別細心の注意をはらって他人から絶縁しようと腐心している。門からグリルとひとまわりして玄関をつけたのもそのためであり、彼らの私生活はがいして物音がすくなく、他にたいして無用なる饒舌にとぼしく、思索的なものであった。路地の片側はアパートで、伊沢の小屋にのしかかるように年中水の流れる音と女房どもの下品な声があふれており、姉妹の淫売が住んでいて、姉に客のある夜は妹が廊下を歩きつづけており、妹に客のあるときは姉が深夜の廊下を歩いている。気ちがいがゲタゲタ笑うというだけで、人びとは別の人種だと思っていた。

白痴の女房は特別しずかでおとなしかった。何かおどおどと口のなかで言うだけで、その言葉はよくききとれず、言葉のききとれるときでも、意味がハッキリしなかった。料理も、米をたくことも知らず、やらせればできるかもしれないが、ヘマをやって怒られるとおどおどしてますますヘマをやるばかり、配給物をとりに行っても自身では何もできず、ただ立っているというだけで、みんな近所の者がしてくれるのだ。気ちがいの女房ですもの白痴でも当然、その上の欲を言ってはいけますまいと人びとが言うが、母親は大の不服で、女が御飯ぐらいたけなくって、と怒

っている。それでも常はたしなみのある品のよい婆さんなのだが、何がさて、ひとかたならぬヒステリイで、狂いだすと気ちがい以上に獰猛で、三人の気ちがいのうち、婆さんの叫喚が頭ぬけて騒がしく病的だった。白痴の女はおびえてしまって、何事もない平和な日々ですら、常におどおどし、人の足音にもギクリとして、伊沢がヤアとあいさつすると、かえってボンヤリして立ちすくむのであった。

白痴の女もときどき豚小屋へやってきた。気ちがいのほうはわが家のごとくに堂々と侵入してきて、家鴨に石をぶつけたり豚の頬っぺたを突きまわしたりしているのだが、白痴の女は音もなく影のごとくに逃げこんできて、豚小屋のかげに息をひそめているのであった。いわば、ここは彼女の待避所で、そういうときにはたいがい隣家でオサヨさんオサヨさんとよぶ婆さんの鳥類的な叫びがおこり、そのたびに白痴の体はすくんだり、かたむいたり、反響をおこし、仕方なく動きだすには、虫の抵抗の動きのような長い反復があるのであった。

新聞記者だの文化映画の演出家などは賤業中の賤業であった。彼らのこころえているのは時代の流行ということだけで、動く時間に乗りおくれまいとすることだけが生活であり、自我の追求、個性や独創というものは、この世界には存在しない。彼らの日常の会話の中には会社員だの官吏だの学校の教師にくらべて、自我だの人間だの個性だの独創だのという言葉が氾濫しすぎているのであったが、それは言葉の上だけの存在であり、あり金をはたいて女をくどいて宿酔の苦痛が

人間の悩みだというようなばかばかしいものなのだった。ああ日の丸の感激だの、兵隊さんよありがとう、思わず目頭が熱くなったり、ズドズドズドは爆撃の音、無我夢中で地上に伏し、パンパンパンは機銃の音、およそ精神の高さもなければ一行の実感すらもない架空の文章にうき身をやつし、映画をつくり、戦争の表現とはそういうものだと思いこんでいる。また、ある者は軍部の検閲で書きようがないと言うけれども、他に真実の文章の心あたりがあるわけでなく、文章自体の真実や実感は検閲などには関係のない存在だ。要するに、いかなる時代にもこの連中には内容がなく空虚な自我があるだけだ。流行しだいで右から左へどうにでもなり、通俗小説の表現などからお手本を学んで時代の表現だと思いこんでいる。事実、時代というものはただそれだけの浅薄愚劣なものでもあり、日本二千年の歴史をくつがえすこの戦争と敗北がはたして人間の真実に何の関係があったであろうか。最も内省の稀薄な意志と衆愚の妄動だけによって一国の運命が動いている。部長だの社長の前で個性だの独創だのと言いだすと、顔をそむけて、ばかなやつだという言外の表示を見せて、兵隊さんよありがとう、ああ日の丸の感激、思わず目頭が熱くなり、OK、新聞記者とはそれだけで、事実、時代そのものがそれだけだ。

師団長閣下の訓辞を三分間もかかって長々と写す必要がありますか、職工たちの毎朝のノリトのような変テコな歌を一から十まで写す必要があるのですか、ときいてみると、部長はプイと顔をそむけて舌打ちして、やにわに振むくと貴重品のたばこをグシャリ灰皿へ押しつぶしてにらみ

つけて、おい、怒濤の時代に美が何物だい、芸術は無力だ！　ニュースだけが真実なんだ！　とどなるのであった。演出家どもは演出家どもで、企画部員は企画部員で、徒党をくみ、徳川時代の長脇差と同じような情誼の世界をつくりだし、義理人情で才能を処理して、会社員よりも会社員的な順番制度をつくっている。それによって各自の凡庸さを擁護し、芸術の個性と天才による争覇を罪悪視し、組合違反とこころえて、相互扶助の精神による才能の貧困の救済組織を完備していた。うちにあっては才能の貧困の救済組織であるけれども、外にいでてはアルコールの獲得組織で、この徒党は、国民酒場を占領し、三四本ずつビールを飲み、酔っぱらって芸術を論じている。彼らの帽子や長髪やネクタイの上着は芸術家であったが、彼らの魂や根性は会社員よりも会社員的であった。伊沢は芸術の独創を信じ、個性の独自性をあきらめることができないので、義理人情の制度の中で安息することができないばかりか、その凡庸さと低俗卑劣な魂をにくまずにいられなかった。彼は徒党ののけものとなり、あいさつしても返事もされず、中にはにらむ者もある。思いきって社長室へ乗りこんで、戦争と芸術性の貧困とに理論上の必然性がありますか。それとも軍部の意思ですか、ただ現実を写すだけならカメラと指が二三本あるだけでたくさんですよ。いかなるアングルによってこれを裁断し芸術に構成するかという特別な使命のためにわれわれ芸術家の存在が――社長は途中に顔をそむけてにがりきってたばこをふかし、おまえはなぜ会社をやめないのか、徴用がこわいからか、という顔つきで苦笑を始め、会社の企画どおり

世間なみの仕事に精をだすだけで、それで月給がもらえるならよけいなことを考えるな、なまいきすぎるという顔つきになり、一言も返事せずに、帰れという身ぶりを示すのであった。

賤業中の賤業でなくて何物であろうか。ひと思いに兵隊にとられ、考える苦しさから救われるなら、弾丸も飢餓もむしろ太平楽のようにすら思われるときがあるほどだった。

伊沢の会社では「ラバウルを陥すな」とか、「飛行機をラバウルへ！」とか、企画をたてコンテを作っているうちに米軍はもうラバウルを通りこしてサイパンに上陸していた。「サイパン決戦」企画会議も終らぬうちにサイパン玉砕、そのサイパンから米機が頭上にとびはじめている。「焼夷弾の消し方」「空の休当り」「ジャガ芋の作り方」「一機も生きて返すまじ」「節電と飛行機」ふしぎな情熱であった。底知れぬ退屈を植えつける奇妙な映画がつぎつぎと作られ、生フィルムは欠乏し、動くカメラは少なくなり、芸術家たちの情熱は白熱的に狂燥し、「神風特攻隊」「本土決戦」「ああ桜は散りぬ」何ものかに憑かれたごとく彼らの詩情は興奮している。そして青ざめた紙のごとく退屈無限の映画がつくられ、明日の東京は廃墟になろうとしていた。

伊沢の情熱は死んでいた。朝目がさめる。今日も会社へ行くのかと思うと眠くなり、うとうとすると警戒警報がなりひびき、起きあがり、ゲートルをまき、たばこを一本ぬきだして火をつける。ああ、会社を休むと、このたばこがなくなるのだな、と考えるのであった。

ある晩、おそくなり、ようやく終電にとりつくことのできた伊沢は、すでに私線がなかったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton